

裁判のためにもう一回

レ◎プされちゃう

検事の息子



ぼくのお父さんは“けんじ”です。

たくさんの人からたよりにされています。

そんなお父さんをぼくはそんけいしています。

だからぼくもしょうらいは、

少年は勉強もできたし運動もできたし学校では学級委員長も務めている、まさに絵に描いたような優等生であった。敏腕検事である父親を心から尊敬していて、自分も絶対に同じ仕事に就きたいと近頃は法律の勉強まで進めている。

ある程度の条文は読めるようになっていた。少年は天才であり秀才でもあり、完璧だった。だからこそ校内に存在する害敵を忌み嫌っていた。

いつも作業服の用務員。腹が突き出ていて醜い顔をしている中年男だが、昔は弁護士をしていたとウワサで聞いた。清潔感の無い容姿にしまりのない身体、とてもそんなふうには見えないが……。

どちらにしろ、今はしがない用務員なのだ。弁護士をやめるなんてきつとかなりの失敗を仕出かしたのだろう。そうでなければ説明がつかない。

僕はああはならない。何歳になっても第一線で活躍する法の番人になるんだ。そう、僕のお父さんのように……。

少年の父親は家の中にいても小奇麗な身なりをしていた。休日でもきちんと髪をセットして、息子をいつもどこかに遊びに連れて行ってくれる。まさに完璧な人間。

少年の歩む道はこの父親を持った時点で決まっていた。子は親の背中を見て育つ。ならば敏腕検事として親子が肩を並べるのは時間の問題だろう。

最高の親に最高の家庭、最高の友達。なんらかのノイズが混じらなければ、悠然と流れるクラシックのように彼の人生は穏やかにかつ完璧に進む筈であった。

そう、“なんらかのノイズ”が混じらなければ———

「へ？」

目の前には中年男の赤ら顔。慣れない寝心地にここが保健室のベッドの上だと気付く。固いシーツの感触を素肌で感じているという違和感がサアッと恐怖に変わった。

見下ろした自分は何も身につけていなくて、男の露出した下半身が自分の後孔に押し当てられていて……驚いて「ひうっ」と鳴くと、振動で尻に違和感を覚えた。

少年のそこはまったく緊張しておらず、むしろ緩み切っていて……ぽっかりと開いているのが自分でもわかる……………ナカがじんじん熱くて、まるでもう何かにしこたま擦られてしまったかのような……………。

「律（りつ）くん、おおう、出るヨッ……」

「え……！？」

グッ。穴に先端を引っ掛けられて嫌悪するが、そこまでの圧迫感はない。しかし男が押し付けてくるたびに胎内に何かを注ぎ込まれているような感覚がして、それはとても熱くて……「え？」「え？」「え？」と自然に声が出る。

すっかり混乱を極めた少年が、目の前の男が誰だったかを思い出すのには少しの時間を要した。

「あ、あなたは……用務員の……？」

「むふふ♡ そう♡ 私は用務員のオジサンだよ～♡」

「いやあンッ……」

穴に竿を擦り付けられて不埒な声が出てしまう。少年は慌てて己の口を塞いだ。なんだ今の声は。戸惑っているうちに追撃されて「あっ」「ふっ」と勝手に漏れだす声に、またしても混乱してしまう。

「これっ……どういう、ことです、かっ……？」

「君は頭痛でしばらく休んでいただろう。眠る前に水を飲んだよね」

「確か、そう、保健の先生に勧められて……」

「そこに睡眠薬を入れておいたんだ。先生は終業時間だからもう帰ったよ。施錠する私が君を任されたんだ」

「それじゃあっ……」

今、僕は計算ずくで放課後の保健室に閉じ込められている？ 保健室の先生もぐるで………もう……乱暴されてしまった……？

絶望ばかりがぐるぐると脳内をめぐる。不意に後ろから垂れる液体の感覚に「ひンッ」と腰を浮かせてしまう。男はそれを塗り込めるようにまた竿を擦り付けてくる。

「いや～気持ち良かったよ♡ 見抜きして中出しさせてもらったからね♡」

「見抜き……中出し……？」

意味はうっすらとわかる。だが理解したくない。こうしている間にもナカからどんどん垂れてきて、目元がじわりと熱くなる。

僕は穢されたのか。これまで両親に大切に育ててきてもらったのに。こんな、こんな変質者のせいで……！

「う、訴える！！　僕のお父さんは検事だ！　絶対にお前を逮捕してもらおう！」

「……………私が元弁護士なのは知っているカナ？」

ググッと至近距離で凄まれて思わず身を引いた。だがそれがなんだというのだ。罪は罪。持っている資格や立場で帳消しになるはずがない。今は絶対に、被害に遭った僕の言い分のほうが強い筈だ。

「いいかい？　私は君に「見抜き」と「中出し」をただけだ……『性行為』をしたわけではない」

「め、目の前で陰茎を露出したり中に射精したのだって『性行為に準ずる』わいせつ行為だッ！」

「ほう、よく勉強しているようだねえ」

少年は頭の中の六法全書をフル活用した。大丈夫だ、こんな卑猥なことをされて訴えられないわけがないのだ。元弁護士だからって口車に乗せられるな。絶対に認めさせて逮捕してやる！

……だが息巻く少年をよそに、男は馬鹿にしたように笑う。

「しかしまだまだ足りないナア。今のままでは私はせいぜい『強制わいせつ罪』……捕まったとしてもせいぜい六か月程度。すぐに出所してまた君の元に復讐に来ることだってできちゃうよ？」

「なっ……」

「せめて『強制性交罪』ならねえ。5年以上20年以下の拘禁刑だから、私も歳だし、復讐も難しくなると思うのだけど」

ここで少年は己の現状を向き合わざるを得なくなる。果たしてこの男にされたのが本当に「わいせつ行為」だけなのだろうか？　本当は眠っている間に「性的行為」までされて……その末の中出しだったのではないのだろうか。

たしかに先程目を覚ました直後の射精では先端が少し埋まっている程度で「性的行為」とは言い難い。だがその前の空白の時間では、何をされていてもわかりはしない。

「あ、あなたを『強制性交罪』で訴えます……！」

「馬鹿な。証拠がないだろう？」

「証拠って……！」

今自分が感じている、後孔への強烈な違和感ではダメなのだろうか。くぱくぱと勝手に開閉して男の精子を垂れ流している、さんざん弄ばれたであろうこの感触……つらいが自分は確実に最後までされている。少年は確信していた。

だが確かに被害者の主観では罪は成り立たないはず。どうすればいいんだったか。この場合は、確か、病院に受診して……。

「ンン？　言ってみなさい。証拠は？」

「お、お尻の穴が……うまく、閉まらなくて……だからっ……」

「ほほう♡ それを裁判官や親の前で証言するのか♡ 見ものだねえ♡」

「〜〜〜〜ッ！！」

ズリズリと竿を押し当てられて少年が悶絶する。これだって性的行為に準ずるわいせつ行為なのに、あくまでわいせつ行為でしかない。軽く胸や尻を触られたりすると罪状は変わらないのだ。

もはやこのまま挿入されてしまえば、男の罪は立証できるのに……………。

「よしよし。法律の専門家としてオジサンが教えてあげよう♡」

「あっ……」

擦り付けが止まった。直前に何を考えていたかポーッとした頭では思い出せず、今しがたの感触への名残惜しさだけが残る。男の表情は満足げだ。

「性的行為というのはね。『内壁深度十センチ』の部分に『男根ピストンの証拠である微物反応』がないと立証できないんだよ」

「ないへき、しんど……おとこね、びすとん……？」

聞いたことのない専門用語だ。びぶつ……というのは少しだけ覚えがある。

やはり元弁護士には知識量で劣るようだ。少年は素直に己の未熟さを認めつつあった。

「君はこういう性的な事件の事例を避けて勉強しているよね。本当に今回の事が立件できる事例だと胸を張って言えるのかい？」

「それはっ……」

「私の対策は完璧だよ。君の体内に私の精子が確認されても「見抜き」と「中出し」だけだという証拠撮りもしてある」

そう言って男はスマホで動画を再生してみせた。先程の、少年が目覚めた直後の映像だ。自分の手で竿を抜き、射精の直前に少年の穴に先端を押し付けている。それだけだ。やはりわいせつ行為の範疇を出ない……………。

「それではわいせつ行為ということで手を打とうか。禁欲生活からの出所後レ◎ブ、興奮するだろうナア♡ 君の人生、もっとメチャクチャにしてあげるよ♡」

「やだっ……やめろおっ……………！！」

両手で顔を覆われ、そのまま固定されてブチュブチュと唇を奪われた。キス……これもわいせつ行為……足りない……この男を重い罪で逮捕するためには、もっと……。

中年男の唾液まみれになって気付く。顔全体にすでに張り付いたような感触がある。眠っている間にすでに舐めまわされているんだ。性行為されながら顔を舐めまわされる自分の姿が俯瞰で浮かび、少年はカッと顔を熱くする。

なんて、卑猥な……………こんなの絶対に許されることじゃない……………絶対にサレたんだ、それなのに……このまま軽い罪だけで終わるわけにはいかない……！

「やだ〜〜〜っ……絶対に、強制性交罪で逮捕してやる〜〜っ……！」

「ふーん……じゃあ、もう一度ハメてあげようか？」

ペロペロと耳を舐めながら男が少年に囁きかける。それはひどく悪魔的な誘惑だった。内容はひどいものだが、それを実現すれば少年の願いは叶う……自分を穢したこの男を、少しでも長く捕まえておくことができる……！

「君がいいならもう私は手を出さないよ。そうしたら二度と立証できない。君はまんまとタダハメされて泣き寝入りする性的いたずらの被害者になるワケだ。検事の息子のクセに♡」
「あ……………あ……………」

「今なら奥までずっぽしハメて立証できるようにしてあげるけど……どうする？♡」
検事の息子のくせに。この言葉が少年には深く刺さった。尊敬する父親は決して悪を許さない。罪を犯したとわかっていながら見逃すなんて絶対にしないのだ。

それならば……自分が今とるべき選択は、決まっているのではないだろうか？

「しろよ……それであなたを逮捕できるなら、安いもんだ……！」

「おほ♡ マジか♡ ちょっともう一回言っ♡」

「僕に性的行為をすればいい！ 早くして！」

スマホを構えてくる男に対して少年はカメラ目線ではっきりと言い放った。男の目が邪悪に細められる。すぐにスマホを放り出すと、嬉々として少年の脚を膝裏から抱え上げた。未だくぱくぱと開閉する秘所が丸見えになり……嘲笑う男の様子に少年の羞恥が燃え上がる。恥ずかしい。もう男を知ってしまった身体を、見られている……………。

だが笑ってられるのも今のうちだ。少年の『内壁深度十センチ』の部分に『男根ピストンの証拠である微物反応』が確認されれば強制性交罪として立件できる。そうなればこの男は人生を棒に振ることになるだろう。気の毒なことだ。

「それじゃあいつくよ～～？♡ 律くんの熱いご要望にお応えしまして♡」

「あ♡ あっ♡」

先端を引っ搔けるように擦り付けられると、竿全体で擦られるより強い快樂が広がる。それが挿入への期待感で身体が萌えている反応なのだと、この時の少年は気づきようもない。ズプッ……驚くほどあっさりと、それは成された。男の陰茎がみるみるうちに少年の胎内に飲み込まれていく。少年は首を上げて必死にそれを目視しながら、自分のスマホで動画撮影し始めた。

「ンッ……あっ……」

「ハメ撮りなんてエッチだね♡ 何に使うのかな～？♡」

「あ、あなたの罪を証明するために決まっている……！！」

「ふーん♡ じゃあしっかり撮っててね♡」

接合部が撮影しやすいように男は腰を浮かせてゆっくりとピストンを開始する。細い窄まりに先端が差し掛かると、少年は慌てて手で男の胸を押しとどめる。

「じゅ、十センチだ！！ 十センチまでしか許可しない……！」

「ははあ、なるほど。ギリギリ証拠として成り立つ位置までね。オッケー♡」

「はあ……はあ……」

ヌプッ、ヌプッ、ヌプッ……男の陰茎は半分ほどしか埋まっていない。あまりの巨大さに父親以上かとも思い浮かべてぶんぶんと頭を振る。お父さんは偉大なのだ。もちろんアソコだって。こんな男に何一つ負けるわけではない。

それにしても思ったよりは行為が楽だ。安心すると同時に、やはり眠っている間にこれ以上のことをされていたのだと確信してやるせなくなる。

一生懸命に画面に接合部が映っているか確認して、たまに男のニヤケ顔を仰ぎ見て、なぜだか腹の奥がキュンキュンと疼いて……呼吸が不自然に乱れる。

もうここで終わらないと。少年は謎の危機感に苛まれて、グッと男の胸を押した。

「もう、終わり……」

「え〜？ もう？ 十センチギリギリの挿入じゃ九センチ辺りの部分までしか微物採取できていないかもしれないよ？」

オジサンだって正確に何センチって測れるわけじゃないし、と不満そうに言われて、少年は確かにそうだと思ってしまった。せっかくここまで許したのなら確実に証拠を取りたい。少年は自ら開脚し、腰を前に出す。男の笑みが広がるのを見たくなくて顔を逸らすと、先ほどよりも奥深くに逸物がめり込んできた。

「ンッ……♡」

チリッ、と痛みより軽い衝撃が擦れ合った場所から広がる。それは引きずられるにつれてじわじわと全身に広がり、やがて少年は声を我慢できなくなっていく。

「アッ♡ アッ♡ アッ♡」

「いいのそんなエッチな声だして♡ 動画に残っちゃうよ♡」

「ンッ……♡」

もう証拠は取れたのだしいいか。録画をやめてスマホを放り出す。すると男は少年の腰を抱え上げて、抜ける直前までズロロロロと引き抜いて見せた。

「さあ、二人が愛し合った証を奥までたっぷり残そうね♡」

「へ……？ ッ！？！？！？♡♡♡」

ズブンッ！！！！♡♡♡

「は……ひえ……？♡ おお〜ッ……？♡♡♡」

「ああついに根元まで♡ 感動だよっ……♡♡♡」

「やっ、やあっ、やああっ……！」

※体験版はここまでです。

続きは販売版でお楽しみください。